

館林キリスト教会

デボーションノート（2009年）

10月 1日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 9章18～27

「ついてきたいと思うなら」

イエス様にお従いするのに妨げとなっているのは自我だと言えるでしょう。イエス様は「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て」と教えてくださいました。自分の考え、自分のやり方、自分の望み、自分の計画と、イエス様の考え、イエス様のやり方、イエス様の望み、イエス様の計画は異なります。自分の考えに固執しているなら、イエス様の考えには気付かないし、従うことができません。イエス様は「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て」と言われました。「日々自分の十字架を負うて」と言われたように、この点について、日々確認と選択が必要、ということでしょう。イエス様はご自分のお考え、やり方、望み、計画でなく、父なる神様の御心を知りその道を選んで歩みました。その結果は十字架の死でした。しかし、それは栄光の復活に繋がっていました。イエス様の十字架の道は、イエス様を信じる者を救う勝利の道でした。

10月 2日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 9章28～36

「祈っておられる間に」

28節の「山」とは、ヘルモン山ではないかと言われている。これは海拔2,800mを越える高い山である。イエス様は朝早くペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人の弟子を連れて登られ、頂上に着いたのは夕暮れであったろう。この記事は、マタイ、マルコの両福音書にもあるが、「祈るために」山に登られ、「祈っておられる間に」み顔の様が変わったということ、またモーセとエリヤが現れて、イエス様と語り合ったことの内容は、イエス様が「エルサレムで遂げようとする最後のこと」であったとは、ルカ特有の記事である。イエス様はご自分で十字架の死を予告されてから、なぜ、すぐエルサレムに行かないでヘルモン山に登られたのか。それは全人類が罪から救われる道は、十字架上で死ぬ以外にない事を確認するためであったのだろう。

10月 3日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 9章37～50

「弟子たちに欠けていた三つの点」

ここでイエス様は、弟子たちに欠けている三つの点を教えている。第一に、弟子たちのイエス様に対する信仰に欠けている点である。ある父親が悪霊に憑かれた息子を癒してくれるように弟子たちをお願いしたが、出来なかった。イエス様は弟子たちに対して不信仰だからと叱られた。第二に、イエス様の二回目

の死の予告に対する理解に欠けている点である。「人の子は人々の手に渡されようとしている」(44 節)という言葉にも、弟子たちの耳には空しく響き、悟ることが出来なかった。第三に、弟子たちが謙遜に欠けている点である。弟子たちにとっての興味関心は「だれがいちばん偉いだろうか」ということだった。弟子である道は、自己否定の道であり、イエス様自身も手本を示されたにもかかわらず、彼らは幼稚な議論をしていたのである。

10月 4日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 9章51～62
「心を定めて」

イエス様がエルサレムに向かう途中、サマリヤ人は快くお迎えしませんでした。弟子たちは激しく憤っています。十字架の死が近づいていました。イエス様はいよいよ堅く心を定め十字架に向かって進み行かれました。そのイエス様に、ある人は、どこへでもお従いします、と言いました。しかしイエス様は神の国のためには休む家もない日々です、と念を押ししました。言外に、今十字架の死に向かって進んでいるのです、その心備えがありますか、と言っておられるようです。他の二人はいろいろ条件をつけました。イエス様が父なる神様にひと足ひと足従い行くお姿は、死に至るまで従いとおした従順のお姿でした。

10月 5日 今日に通読箇所 伝道の書 1章1～18
「空虚な人生」

ソロモン王は、即位の最初は、自分の弱さと責任の重大さを知って、深くへりくだり、神により頼み、その敬虔を神から称賛された人物だった。しかしその生涯の中期には、いくらか脱線して栄耀栄華の生活を送った。その結果彼は、かえって徹底的に世の空しさ、はかなさを実感することになったのだ。パスカルはいう「聖書中最も悲劇的な人物は、貧困と病気と孤独を経験したヨブと、深く栄華の空しさを学ばされたソロモンだ」と。ここに記されたのは「一切が空である」という彼独特の哲学だ。これはキリストの示された「すべてこの水を飲むものはまた渴くであろう」という、世と人間に関する真理だ。とともに「すべてこの水を飲むものは永遠に渴くことがない」という、キリストの福音を受け入れる準備となるものだ。

10月 6日 今日に通読箇所 伝道の書 2章1～17
「無常と徒勞」

ソロモンは人に羨まれる王者として、好むものは何でも手に入れ、何でもやってみることができた。実際に遠慮なく実行してみたのだ。また彼はたぐいまれな秀才だったから、有名な学者王として勉学、研究の楽しみも知っていた。しかし彼はその申し分のない生活のなかで結局、徒勞感、空虚感に襲われるのを如何ともしがたかった。「知者も愚者も(富者も貧民も)同じような運命に見舞

われ、同じように死ぬ。また来るべき日には、どちらもみな忘れられてしまうのはどうしたことだろう。そこで私は生きることをいとった」ここまでだったら、同じ王者で、同じ無常の観察者だった釈迦の言葉に、似ていなくもない。

10月 7日 今日の通読箇所 伝道の書 2章18～26

「単調と無意味」

昔ロシアで囚人をいじめるのに、こういう方法があったそうだ。まず、水一杯入ったバケツと空のバケツを与える。そして一日中かわるがわるバケツの水を入れ替えさせるのだ。別に特別にひどい目には会わせなくても、その囚人がいわゆるインテリでものを考える人間であればあるほど、作業の無意味と単調さに疲れて自殺してしまうケースも多かったそうだ。生活の空しさに疲れ果てたソロモンには、人生そのものさえ罪人に与えられた神の刑罰であるように思われたろう。「神は罪人には仕事を与えて、集めることと積むことをさせられる」(26節) その空しさに気付いて早く神に立ち帰るものは幸いだ。

10月 8日 今日の通読箇所 伝道の書 3章1～15

「万事に時がある」

ここにある「すべての業には時がある」という一連の言葉には、第一に「なんでも時期というものを考えて、時期にあわないことをするな」第二に「機会というものを失ってはならない」第三に「どんな時、状況、出来事にも、必ず神の定めた意味というものがある」第四に「どんなとき、どんな出来事にも、祈って行けば、必ず神によって対処の道、方法が開かれる」などの教訓が示されていると思われる。もし我々が祈り深く神の導きを頂き、与えられているそれぞれの「時の意味」をわきまえて、敬虔、真剣、賢明に生きるならば「神のなされることはみな、時にかなって美しい」という真理を悟るに違いない。だからクリスチャンには本当の意味で、悪い時も悪い出来事もない。「ローマ書8章28節」に記してあるように、つまりその一切が益となるのだ。

10月 9日 今日の通読箇所 伝道の書 4章1～16

「友達について」[9節]以下に友達の事が書いてある。一人でするより二人でやれば、もっと大きな収益をあげられる。一人が倒れることがあってもその時友人は彼を助けるだろう。二人の場合だったら生活にもゆとりがある。孤独の寂しさを読んだ歌に「怒りたるわれの心のみじめさは、冷えたる飯を噛みてもほゆ」などというのがあるが、なんとも情けない姿だ。闘争も二人で戦う方が有利だ。一人では、いやになるともう長続きは難しいが、三人だったら気をとりなおして粘ることもできよう。さて我々がクリスチャンになって本当に「良かったなあ」と思うことの一つは、神様と祈りとを中心とした、すばらしい「信仰の友」を得たことだ。私も信仰生活56年、真に良い友に囲まれて生きてき

た。ありがたいことだ。

10月10日 今日に通読箇所 伝道の書 5章1～12

「祈りの常識」

祈りは人と神の会話だ。堅苦しい決まり文句や、無意味な繰り返しがあるはずはなく、もっと自然なものだと思う。しかし自然も度が過ぎると神様に物言を言て聞かせるような、またはバナナの叩き売りのような、威勢はいいが乱暴な祈りに脱線もする。それを熱心の現れと誤解して競争になると、もうめっちゃめっちゃだ。人間の間でも時には悲鳴を上げたり、泣き出すこともあるが、しかし普通は「軽々しく口を開き、言葉を出そうと心に焦る[2節]」ものではない。祈りにもそういう常識が必要だ。

10月11日 今日に通読箇所 伝道の書 5章13～20

「物の両面」伝道の書はとても実際のな聖書で、いつも物の両面を見て、片寄った極端な発言をしない。[13～15節]には永遠の相から見た場合の、富の空しさを言っている。しかし[16節]以下は現世では、富によってその分に応じた楽しい生活が許されるのであって、その限りにおいては富にも意味があり働くことも大切だと言う。インドなどでは民衆の宗教心が徹底して、現世的、比較的の観念が薄く、ただ無欲貧困を誇りとする風潮が、結果的に国の繁栄を妨げているようだ

10月12日 今日に通読箇所 伝道の書 6章1～12

「厭世感」

「無常感」といい「厭世感」という、ソロモンの感慨もここにきわまったというべきだ。これは冷徹に現実を観察する者にとっては一つの事実で、この世で楽しそうに浮かれている方が、いわゆるおめでたい人で、余り利口ではないのだ。ただしこれは「神を見失った者にとって」という但し書きが必要だ。つまり「全てこの水を飲むものはまた渴く」ということなのだ。しかしキリストの救いを受け神に立ち帰る者は、同じキリストの「しかし私が与える水を飲む者は、いつまでも渴くことがない」という、みことばの約束を経験するのだ。

10月13日 今日に通読箇所 伝道の書 7章1～14

「順境、逆境」

良くできた人のことを尊敬の気持ちで「あの人は苦勞人だから」などと言うし、反対に「結局彼は苦勞しらずの坊ちゃんだ」と軽く評価されることもある。ここに「悲しみは笑いにまさる。顔に憂いを持つことによって心は良くなるからである」とあるのはその意味だ。また「順境の日には楽しみ。逆境の日には考えよ。神は(我々の人生のなかに)かれとこれとを等しく造られたからである」

というみ言葉も尊い。完全幸福、完全不幸という人生は有り得ない。その人生の秘訣はあらゆる場面で思い煩わず、遭遇の意味を考え、それを生かしてゆくことにあるのだ。

10月14日 今日に通読箇所 伝道の書 7章19～29

「賢婦人」

「千人について、真の男が一人はいる。しかし真の女はいない」とは女性侮辱の言葉だ。しかし昔は女性はもともと有能さを期待されず、従って教育の機会も与えられなかったのだから気の毒だが仕方がない。ましてソロモンは賢明な家来を多く求めたのに比べて、女性は快樂のために、容姿の美を標準に集めた様だから、それではりっぱな婦人にめぐり会えないのも当然で、言わば自業自得だ。そこえゆくと私などは、最初から容姿などに期待しなかったから、千人に一人の賢婦人を見つけることができたかどうか、よく知りません。

10月15日 今日に通読箇所 伝道の書 8章1～13

「人間の顔」

「人の知恵はその顔を輝かせ、またその粗暴な顔を変える」リンカーンは就職希望者を断った理由に「顔が気にいらなかったからだ」と言った。「顔は生まれつきゆえ、顔で判断しては気の毒だ」と言われ「いや40才以上の人は自分の顔に責任がある」と答えたそうだ。確かにこの聖書にもあるように、本人の長い経歴と人格はその顔にも反映するだろう。またこの章にはいろいろな社会の矛盾が指摘されているが、それにも対応の方法がある、という教えが書かれていて、考えさせられる。

10月16日 今日に通読箇所 伝道の書 9章1～12

「智者の嘆き」

ソロモンのような智者は先から先が見えるので、不安もあるしまた空しさも感ずるだろう。智者も愚者も、善人も悪人も、生涯、運と不運の偶然に支配され、また最後に死んでしまえば、結局みな同じ運命だ。この章でソロモンがいうのはそのことだ。しかし我々はこれに「現世、地上だけ見れば」という言葉を入れて読まねばならない。ラザロのような善人が貧しく、不敬虐な金持ちが幸福なのも地上だけのしばらくの場面だ。キリストはルカ16章のあの話で、この大切な真理を教えて下さったのだ。伝道の書でこうした疑惑を吐いたソロモンもやがて真理に立ち帰る。12章の最後には、それが見える。

10月17日 今日に通読箇所 伝道の書 10章1～15

「知恵と工夫」

ここからは短い、断片的な教訓が集めてある。鋭くて皮肉で、ユーモラスで、

いくらか謎めいている。これは謎解きの興味と、また記憶を助けるのに役立つのだろう。10 節あたりは、日本で「不器用では一生楽はできない」などというのと同じだろう。切れない刃物を力まかせに使って、息の方が切れるのは素人の証拠だ。本職は刃物を研ぎすましておく。またちょっとした手順の工夫をすれば、作業もやさしく、スムーズに行き、能率も上がるわけだ。また特別上手な人でなくも、安心して作業に参加できる。何事も知恵と工夫が大切。

10月18日 今日に通読箇所 伝道の書 11章1～10
「未来は不明」

[2、5、6 節]の終わりに「知らないからだ」と書いてある。人間には、現在起きていることでも、精密、微妙な問題になるととても分からない。まして未来に何が起こるかはただ神のみの知るところで、人間には隠されている。ここは「どうせ先々は分からない。いっそその日暮らしで行こう」でなく「知らねばこそ神に任せよう。でも許されるだけは将来の準備もしよう。それが我々の道徳的な責任だ」ということを教え「どうせ先のことは分からない。いっそ怠けてしまえ」でなく「神を信じて、かえって忠実に奉仕しよう」と教える。人間に隠された部分には、神の摂理がある。分からないことが即、絶望ではない。結果は任せて、ただ忠実に神に従おう。

10月19日 今日に通読箇所 伝道の書 12章1～14
「人生の結論」

これから進学する、就職も考える、結婚も決める、という「若い日に」神様を信ずる生活に入り、これらの大切な問題についていちいち祈りながら、また神の導きや助けをいただきながら、人生のステップを進めて行くのは最高の幸福だと言う。また続いてこの章には、人が老齢に向かう姿が、詩的象徴的に記してある。これも一つの人生の現実だ。老年期もまた特別に神様の助けが必要なのだ。人生の意味、価値、秘訣、その全体は「神を恐れ(信じ)その命令を守れ」という教えに尽きる。これがソロモン王の書の結論なのだ。

10月20日 今日に通読箇所 ホセア書 1章1～11
「不幸な家庭」

ダニエル書の後半は聖書中有数の難解な預言で交読には適さないからホセア書に進む。ホセアは主の命令によって「淫行の女ゴメル」と結婚した。しかし彼女も最初からの淫婦ではなく、途中からそんな女だと分かったのだろう。その腹から次々と生まれる子も、ホセアの子であるか疑わしいありさまだった。しかし神様は離縁することを許さず、忍耐をもって彼女を愛しつづけることをお命じになった。やがて彼女も悔い改めたと思うが、彼は苦しい家庭生活を強いられたのだ。しかしこの経験から、イスラエルのくり返しの反逆にもかかわら

ず、いつまでも忍耐し愛しつづける神の悲しみを理解することができたのだ。彼が「涙の預言者」と言われるゆえんである。

10月21日 今日の通読箇所 ホセア書 2章1～7

「涙の預言者」

ホセア書は、悔い改めた奥さんを再び家に迎え入れ、彼の家庭の問題が解決した後に語られた預言集だが、神に背くイスラエルの民に対する警告の言葉の中に、彼自身の苦い経験がちりばめられ、神の御思いと重ね合わせて語られるのを、我々は読み取ることができるのだ。背く民に対する神の悲しみを訴え、悔い改めを迫るその間、彼の思いはいつも切迫し、その目は常に涙にぬれ、人々の感動を呼ばないではおかなかつたろう。ましてホセアの寛容と愛によって救われた奥さんが、常に傍らに立って証をしたろうから、彼の集会はすばらしかったと思う。それゆえ昔から彼もエレミヤとともに「涙の預言者」と呼ばれているのだ。

10月22日 今日の通読箇所 ホセア書 3章1～5

「奥さんの身請け」

ホセアの妻は勝手奔放な生活の結果、男にもてあそばれた最後は、金で売られた遊女の境涯におちぶれていたらしい。ホセアは彼女のありかを捜し出した。そして神に命ぜられ、助けられ、励まされて、銀15シケルと大麦1ホメル半をもって彼女を請け出し、助け出し、連れ戻したのだ。2章14節に言う。「それゆえ見よ。わたしは彼女をいざなって荒野に導いて行き、ねんごろに彼女に語ろう。わたしは彼女にぶどう畑を与え、アコルの谷を望みの門として与える。彼女は若かった日のように答えるであろう」と。この章でも彼は言う「あなたは長くわたしの所にとどまって淫行をなさず、また他人のものとなつてはならない。わたしもまたあなたにそうしよう」と。いまはさすがの彼女も悔い改めた。ホセアは本当に、神の愛と救いを実行したのだ。

10月23日 今日の通読箇所 ホセア書 4章1～10

「淫行の民」

ホセアは淫行の奥さんに対して忍耐と寛容の限りを尽くし「涙の預言者」と言われるが、その悲痛な経験は、神に背くイスラエルに対して語る時、強い激しい非難と警告の言葉になって現れた。神の悲しみと怒りが良く分かるからだ。[4～6節]においては、この悲しむべき状態の民に対して、ほとんど警告しない祭司、預言者の怠慢を責める。彼らはイスラエルの指導者として、神の代理人として、神に代わって民に警告を発すべき者たちだ。しかるに彼ら自身、神の律法を忘れた。神に関する知識も感情も失った。ほとんど無関心だ。そして自分自身が昼は職務につまずき、夜は私生活につまずいているのだ。結果的には教

えもせず警告もしないことによって、しかも祭司の立場と報酬を受けることによって、実は民の罪を食い物にしていると、非難する。

10月24日 今日に通読箇所 ホセア書 4章11～19

「偶像と淫行」

ここに指摘されたイスラエルの罪は、偶像礼拝と酒と姦淫である。実はこれらの罪は不思議に結びついている。昔から「お神酒（みき）上がらぬ神はない」などという。また江戸の吉原、京都の祇園など、偶像に結びついた遊郭や遊び場も多い。「彼らは山々の頂きで、かしの木、テレビンの木の下で供え物を捧げる」とは偶像礼拝のこと。「酒は思慮を奪う」のは誰にも良く分かっている。「男たちは宮の遊女とともに犠牲を捧げる」というのは偶像に伴う女遊びのことだ。彼らが真の神を離れ、酒と遊興にふけるありさまを見て、ホセアは悲しみつつ厳しく警告する。「エフライムは偶像に結び連なった。そのなすにまかせよ。彼らは酒宴のとりことなり、淫行にふけている。彼らはその光栄よりも恥を愛する」と。我々はこの言葉を読むと、今の日本が思い見られて、よそ事とは思えないのだ。

10月25日 今日に通読箇所 ホセア書 5章1～12

「神に対する淫行」

ホセアの妻がそうであったように「エフライムよ、あなたは今淫行をなし、イスラエルは汚された」「彼らは主にむかって貞操を守らず、ほかの者の子を産んだ」。ホセアはかつての、妻に対する自分の怒りや悲しみを思い、今宗教的淫行、すなわち偶像礼拝の罪にふけるイスラエルに対する神の怒りと悲しみを推察し、神に代わって切実に呼びかけるのだ。しかしイスラエルは悔い改めようとはせず、警告するホセアを「しみのように」「腐れのように」忌み嫌っている。かつてのホセアの妻のように。聖書の中にくり返し最も多く出てくる罪は「偶像礼拝」だ。これはいかにこの罪が多いか。また神がいかにこの「靈的姦淫」の罪を悲しみ憎み給うかを語っている。

10月26日 今日に通読箇所 ホセア書 5章15～6章3

「裁きと救い」

ホセアはその妻が勝手な行動をする間、祈りつつじっと待っていた。彼女が「罪を認めて、わが顔（ホセアの）をたずね求めるまで」待ったのだ。やがて彼女は「悩みによって、わたし（もとの主人）を尋ね求めて言う『さあわたしは主に帰ろう』と」。不倫の喜びは長く続かない。やがて悩みと苦しみが襲ってくる。その時、主人ホセアの愛と真実と忍耐は彼女の悔い改めをうながしたのだ。そして彼は彼女を許し受け入れた。いまここにホセアはイスラエルの民に言う「主はわたしたちをかき裂かれたが、またいやし、わたしたちを打たれたが、また

包んでくださるからだ。彼女と同じようにいま悔い改めて主に立ち歸れば、神はホセアと同じように許し、彼らをいたわり介抱し、また祝福して下さるのだと。

10月27日 今日に通読箇所 ホセア書 7章1～10

「かえさない菓子」

不信仰、偶像礼拝、不道德、政治的野心、陰謀など、この時代に渦巻く罪のありさまが描写されている。パン屋さんは毎日パンを焼く。それがストップするのは、パン生地の準備中か、火の起こるのを待つ間ぐらいだ。そのように実は間断なく罪が行われている。王はそのため健康を害し、信望を失い、家来たちは陰謀をめぐらす。機会があれば陰謀が燃え上がり、お互いに滅ぼし合う。彼らは遠慮なく偶像教徒と入り交じって交際する。彼らは悔い改めないで、裏返すのを忘れた火の上の菓子のように黒焦げだ。癩病の初期の白髪が生え始まったのも気に止めない。ただ裁きを待つだけの末期症状だ。これがイスラエルの現状だった。ホセアはそれを指摘して止まない。

10月28日 今日に通読箇所 ホセア書 8章1～10

「政治と宗教と産業」

[4節]には当時のイスラエルの政治のようすが見える。国民が王侯を立て、あるいは自分で王侯になる。しかし彼らは祈りもせず神のみ心を求めもしない。神はこの王侯の政治には関知せず、祝福も与えない。それはまるで金銀で飾りたてた偶像と同じだ。[5節]サマリア人は金の子牛を主と称して礼拝した。彼らはこれを「主」と呼んでいるのだから偶像ではないと強弁する。しかしこれを神は憎み給うた。[7,8節]祝福を失ったイスラエルの産業は荒廃して、風を蒔いて風を刈り取るように収穫はない。ダビデ時代に諸国民に尊敬され、恐れられたこの国も、今は侮辱され孤立している。[9,10節]彼らはアッシリヤを当てにして同盟を結ぶが、かえって彼らの攻撃を受ける。これらも神の裁きの結果だ。

10月29日 今日に通読箇所 ホセア書 9章7～14

「宗教と性の混乱」

[7～9節]には宗教の混乱が描かれている。預言者すなわち宗教家は、本来「神の霊に感じて」人を導くものだ。ところが実は彼らの正体は「愚かな者」「狂った者だ」。彼らは人々を正しい信仰と正しい道に導くべき「見張り人」なのだが、実はその道には罅と落とし穴がある。しかしその原因は彼らのみにあるのではない。人心が乱れて低級なものを求めるようになった、そこをつけこまれるのだ。[10～14節]には性道徳、性秩序の混乱が見える。妊娠、出産は祝福でも喜びでもなくなって、まるで災難のようだ。健康正常な出産も、育児も家庭教育も期待できない。無責任な親や家庭から生まれた子供等は、空しさ、誘惑、罪惡の餌食

にさらされている。あわれな話だ。

10月30日 今日に通読箇所 ホセア書 10章11～15
「新田を耕せ」

[12節]は一種の挿入句だが、伝道の奨励としてよく用いられる。「新田を耕せ」は、全く新しい人に福音を語る場合、開拓伝道の場合などに当てはまる。山林や岩地は「福音の種」を受け付けない。まず開墾が大事だが、人間の心の開墾は何によってできるだろうか。それは理屈や説教でなく、クリスチャンの行為の感化によらなければならない。次に「正義の種」すなわち「福音の言葉」を蒔くことだ。結果は二の次にして、とにかくみ言葉を人の心に注入することが大切だ。み言葉は思いがけない時に記憶からよみがえり、人を救いの経験に導くのだ。そうすれば「いつくしみの実を刈り取る」。すなわち救いの感謝を刈り取ることができる。神様は収穫のために「雨のように」この働きを助けて下さるのだ。

10月31日 今日に通読箇所 ホセア書 11章1～9
「燃え起こる憐れみ」

生活は貧しく前途も不安で、助けと導きを必要とする青年の頃に教会に来て、救いと神の助けを得た人が、やがて成功して安定繁栄に及び、神を離れるケースは多い。神はイスラエルをエジプトのくびきから救い出して、多くの祝福をもって彼らをカバーした。そのイスラエルの神に対する抵抗反逆は、憎むべき忘恩行為だったのである。神はこれをとがめる。また叱る。しかし同時にそのうちに「憐れみ」の心が燃え上がるのだ。そしてただただ彼らの救いを願い期待するのだ。怒りと裁きは決して神の望みではない。このみ言葉を読むと、かつて不貞の妻を許した思い出が神の愛と入り混じって、涙の訴えになるホセアの心境が察せられる。実にいつの時代にも「神の寛容」こそが「我らの救い」なのだ。